

付録 あとがき

本審議会は、委員一人ひとりが個人として問題意識を持ち、何とかしたいという思いがあり、それが審議会に参加する源泉となっていました。とは言え、それぞれ専門性も異なり、違った意見を持っている中での議論は難しいものもありました。しかし、温暖化に関して論点を明確にしつつ、1回の会議で5~7時間と時間をかけて議論することで、必ずしも十分とは言えませんが、有意義な議論ができたと考えています。

最後に、全会議を終えた感想など、各委員から一言コメントいたします。



荒井直樹

若手審が読者の皆さんに発信するメッセージは「心・技・体」です。

これは、国、企業、そして国民ひとりひとりの各主体が、それぞれの心（意思・価値観）、技（技術の開発・利用）、体（制度・仕組み）を少しずつ変えていくことで、低炭素社会に移行しよう、というメッセージです。もちろん、これは理想であり現実にはとてつもなく高いハードルがあります。世界各国の政治的な駆け引き、経済成長との相克、国・企業における公平性の考え方、食糧・貧困・資源・水などの様々な問題との両立など課題は山積みです。

若手審では、それらの問題を踏まえながらも、理想的な世界を目指し、限られた時間の中で議論し、結論を出しました。これをきっかけに、世の中が少しでも低炭素社会に移行し、持続可能な地球・社会が導かれることを期待します。

榎原友樹

「2050年で50%削減」を実現するような低炭素社会を実現することについては、私自身、実は非常にチャレンジングで難しい課題だと思っています。しかし、一方で地球温暖化によって起こりうる様々な影響を考えると、やはり何としてでも影響を最小限にとどめなければとも思うのです。「心・技・体」の提案には、この難しい課題への挑戦の意味も込めたつもりです。スポーツ選手が金メダルという難しい目標を目指して「心」と「技」と「体」を日々鍛えるように、低炭素社会の実現という共通の目標に向けてあらゆる主体が力を合わせて、計画的な取り組みを行っていかねば達成が難しいと考えています。一方で、だからこそ、その先にある低炭素社会というものは金メダルのように魅力的で、挑み続けるに値する社会でなくてはならない、そんな思いでこの活動に参加し、議論を続けてきました。我々の親の時代は、日本を戦後から立ち直らせるという大きな課題に立ち向かい、かつてないほどの経済成長を実現しました。我々の世代に求められていることは、更に大きな地球レベルでの課題です。いやはや、とてつもない課題が与えられたなぁと思う一方で、この課題への挑戦権が与えられる世代に生まれたということに対して、誇りとともに沸き立つ情熱を感じている、そんな青臭さ満点の三十代、今日この頃です。

江守正多

仕事の会議では最年少のことも多いですが、若手審では最年長でした。立場や意見が凝り固まっていない年下の人たちと、刺激的で創造的な議論を楽しむことができました。

以前は、科学者の価値中立の観点から、社会をどうしたほうがよいとか発言するのは控えていましたが、最近是个人的な意見として言いたいことは言うようになりました。若手審の議論に参加して低炭素社会のことを考えていく中で、自分の中に湧き上がってきたのは、「無駄なエネルギーを使う自由」は制限されてよいのではないかと、という考えです。例えば、「喫煙したくない人の前で喫煙する自由」は近年急速に制限されるようになってきました。それは「喫煙しない自由」と「喫煙してよい場所で喫煙する自由」を両立するための必然だと思えます。同様に、「温暖化を止める自由」と「必要なエネルギーを使う自由」を両立するためには、「無駄なエネルギーを使う自由」は制限されてよい気がしています。これが、今回の「心技体」の「心」と「体」の部分の僕なりのひとつの表現です。それは、特殊な倫理の導入を必要とすることなく、近代の合理精神の延長上に可能なことのように思えます。

小田潤一郎

多くの議論を行いました。それでもなお委員の間で意見の対立が残り。排出削減への意気込みは同意できるものの、私個人は、国際合意の困難性（国益の調整）、国内の社会的・政治的合意可能性（権益の調整）、各種政策の副作用、エネルギー効率向上とリバウンド、大規模技術の社会的側面、政府研究開発の困難性、といった現実社会の複雑さをもっと考慮し、より現実性を持った提言にすることを主張してきました。

例えば、目指すべき長期目標については、既往の費用便益分析の事例、費用便益分析で考慮することが難しい道義的側面やリスク認知に関する私個人の価値観、上記の現実社会の複雑さから、「2050年時点で先進国は2000年比半減、途上国はBAU比30%減、2100年に世界で2000年比半減（大気中CO₂ 550 ppmv 安定化に相当する排出パス[数値はCO₂ only]）」が、妥当であると考えております。また、国際枠組みによる資金移転は、限定的な役割に留まると考えます。CDM、ODA、あるいは各種貧困削減プログラムといったこれまでの国際枠組みが、（一定の成果をあげているものの）時として既得権益となり、モラルハザードを生み、結果的に非効率な制度となりがちな点は否めません。

温暖化は社会のあらゆる部分とつながりがある総合的な問題です。ぜひ皆さんの賛同、批判をお寄せいただきたく存じます。そのような意見をいただくことが、議論の次のステップにつながると期待しております。

川島悟一

若い世代による自主的な審議会を企画した1つのきっかけに昨年夏に傍聴した中央環境審議会と産業構造審議会の合同審議会があります。その議論を聞いて、「若い世代の未来を殺すつもりなのか？」という絶望感を感じました。私が環境問題に関心を持ったのは小学5年の頃ですが、「このような社会では環境問題は解決しない」と中学2年の頃には解決を諦め、その後の長い間、環境問題なんか気にしないようにしていました。合同審議会の傍聴で得た感覚は、そのときの絶望感と同じものでした。

しかし、今の私は中学生の頃と違い、可能性のある限り、諦めないで行動していくことで、社会を

変えていくことができると知っています。その一歩として、若い世代だけで自分たちの未来を、どのような低炭素社会を、どのようにするのかを議論しようと思い付いたのです。若手審で示した低炭素社会像とその社会をつくるためのロードマップが、私と同じ世代、さらにはより若い世代に明るい未来の道を示すことができれば、私にとっては一番の喜びです。

少なくとも私は、この議論を通して、低炭素社会の要素を含めた持続可能な社会のビジョンが見えてきました。そして、それに向かって、社会を変えていくことにワクワクしています。だから、もっと多くの若い世代の人たちにこの面白さを知ってもらえるよう、今後も様々な仕事や活動をしていきたいとかがえています。

久保田泉

若手審の委員は、専門性も立場も異なっていて、様々な意見を持っていましたが、低炭素社会実現に対する熱意、そして、「制度とは、自分達で作りあげ、使っていくもの」という認識は一致していたように思います。後者については、当たり前だと思われるかも知れませんが、実はそうでもありません。制度は所与のものとする人が多いのではないのでしょうか。低炭素社会をいかに実現するかという若手審の提言、そこに至るまでの議論に参加できたことが一番の収穫ですが、より広く、「目的に対して合理的、かつ明確でわかりやすい法制度のあり方が個人々の妥当な自己決定の助けになる」という法制度についての考え方を再確認できたことも、私にとっては重要な成果です。この報告書をきっかけにして、低炭素社会構築に関する議論がさらに深まっていくことを願っています。

馬場未希

日本に暮らす私たちは、1年間に13億6000万t-CO₂(環境省による2005年度の確定値)もの温暖化ガスを排出しているのだそうです。世界のどこかの氷河を溶かしながら、小さな島を海に沈めながら、生態系や気候のバランスを崩しながら日々を過ごすことをどうしたらやめられるのか、真剣に議論しました。1人でも多くの人に、読んでいただければと思います。

藤津朋子

気候変動問題は我々世代の、そして我々の子供世代が直面する実際の課題です。大学一年生の時に参加した京都会議で世界がこの問題に真剣に取り組んでいることに衝撃を受けてから早10年以上が過ぎ、気候変動への対策がようやく本格的な実行の段階に入ってきたことを実感しています。若手審ではそれぞれが専門性を生かし、余計なしがらみに捕らわれずに、自分達の問題として地球や日本のあるべき姿を議論してきました。今回の議論を通じ、「2050年までに半減」という最近巷でよく見かける長期目標は、あらゆる人の意識と行動の抜本的な変革を必要とする、本当に難しいゴールであることを再認識しました。この報告書を見てくださる皆様一人ひとりが、「心・技・体」のそれぞれにおいて「自分に何ができるか」というミクロの視点と、「世界は、日本はどうあるべきか」というマクロの視点を持っていただければ幸いです。そして、ただ単に何かを我慢する世界ではなく、「足るを知る」という日本人が本来持っていた「心」を基盤に真の豊かさを実現する、そんな低炭素社会にしていきたいと考えています。

森洋一

地球温暖化への関心は日々高まっていますが、具体的なアクションを取ることができないことについて、もどかしく思っている方がとても多いように感じています。そして、若手審のメンバーたちも、それぞれ温暖化に関わる専門的な知識を持ちながら、本当に必要な対策にかかわる議論が進まないこと、実際のアクションへと繋がらないことへの危機意識を強く抱いているからこそ、自らその議論を始め、これを広く発信していこうと考えたのだと思います。地球温暖化の抑制は、経済のあり方、生活のあり方を変えずには、実現しません。だからこそ、様々な立場にある人々がそれぞれの立場を超えて、同じ目標に向かって徹底的に議論を深め、スピーディに行動に移していくことが大切ではないでしょうか。地球も、世界も、待ってくれないのですから。

<以上、あとがき>